

青年期における 自閉スペクトラム症傾向と自尊感情の関連

大 石 苑 子

Relationship between Autism Spectrum Disorder Tendencies and Self-esteem in Adolescents

OISHI Sonoko

Abstract: In recent years, it has been reported in the media as if developmental disabilities and crimes are linked, but it is a wrong belief that people with developmental disabilities commit crimes, and such a link has not been validated. It is not the developmental disorders themselves that are the cause of offenses, but rather the inappropriate interactions with those around them without understanding about developmental disorders, which may affect their self-esteem and cause secondary disorders. The present study focused on autism spectrum disorders (ASD) and examined the relationship between the tendency and self-esteem by hypothesizing that the higher the tendency for ASD, the lower self-esteem, and that there may be gender differences. An Internet-based questionnaire survey was conducted and analyzed, and the results showed that gender had no effect on self-esteem, and the higher the ASD tendency, the lower the self-esteem.

Key Words: autism spectrum disorder, self-esteem, adolescents

要旨：近年、発達障害と犯罪が結びついているかのような表現が報道でなされることがあるが、発達障害のある人は罪を犯すというのは間違った認識であり、そのような関連は認められていない。罪を犯す要因は発達障害そのものにあるのではなく、発達障害について理解のないまま周囲の不適切なかわりを受けることが自尊感情の低下に影響し、そのことで二次障害を引き起こしてしまうのではないだろうか。本研究では、自閉スペクトラム症に焦点を当ててその傾向と自尊感情の関連について、自閉スペクトラム症傾向が高い人ほど自尊感情が低く、また性差があるのではないかと仮定し検討した。インターネットを使用したアンケート調査を行い、分析を行った結果、性別は自尊感情に影響を及ぼさず、ASD 傾向が高いほど自尊感情が低いと、ASD 傾向と自尊感情の関連が示された。

キーワード：自閉スペクトラム症、自尊感情、青年期

第 1 章 問題・目的

第 1 節 研究意義

東海道新幹線車内殺傷事件が発生したのは 2018 年 6 月 9 日のことである。事件に関する報道は発達障害や自閉症、アスペルガー症候群などの用語とともになされていた。また、デジタル版新聞でも発達障害と犯罪が結びついているかのような表現がなされており、心理学的知識のない人々が発達障害のある人は罪を犯すと誤解しかねない記述となっていた。別府・小島（2010）によると、発達障害のある人は罪を犯すというのは間違った認識であり、そのような関連は認められていないという。2019 年 11 月 28 日には東海道新幹線車内殺傷事件の初公判が

行われ、再度報道で取り上げられた。2003 年に長崎で起きた男児誘拐殺人事件でもマスコミは一斉にアスペルガー障害ないしは広汎性発達障害と少年犯罪の関連を報告し始め、発達障害に対する世論のイメージが著しく損なわれたが、別府・小島 (2010) によると、発達障害そのものが原因となり非行や犯罪に結びつくということはないという。もちろん発達障害のある人が絶対に罪を犯さないとはいえないが、それは「健常」と呼ばれる人が絶対に罪を犯さないとはいえないのと同じことではないだろうか。また、別府・小島 (2010) によると、高機能自閉症児がその障害ゆえに他者の気持ちや感情を読み取ることができず被害感を強めた結果、犯罪行為に至った可能性、また犯罪事例の大半が未診断例であり、犯罪行為に至った後に診断を受けていることから、障害を気づかれないまま周囲の不適切なかかわりを受け続けてきた可能性の高さを指摘し、そのことが犯罪行為へと至らせた原因の本質であるといわざるをえないという。越野 (2011) によると、高機能自閉症やアスペルガー症候群を抱える子ども達の社会生活における不適応状態の背景には、行動に必要な社会的スキルが獲得されていないというだけでなく、彼らの抱える特異な身体生理的特徴があり、そのことを周りの人たちから理解されていないことがわかるという。発達障害における特性によって、どのような認知が行われるのであろうか。発達障害について理解のないまま周囲の不適切なかかわりを受けることが自尊心の低下に影響し、そのことで二次障害を引き起こしてしまうのではないだろうか。本研究では、発達障害の中でも自閉スペクトラム症に焦点を当ててその傾向と自尊心の関連を検討することで、社会で生きていく中で困難さを感じている方々への適切な支援の在り方を考える。

第 2 節 ASD と自尊心について

自閉スペクトラム症は Autism Spectrum Disorder と言われ、ASD と略される。アメリカ精神医学会が出している DSM という様々な精神疾患を診断するためのマニュアル第 5 版 (DSM-5) による ASD の診断基準を (表 1) に示す。SM-IV-TR (Text Revision: 診断基準はそのままに解説記述部分が改訂されたもの) においては、自閉症 (自閉性障害)・小児期崩壊性障害・レット障害・アスペルガー障害・特定不能の広汎性発達障害の 5 つのサブグループにわけられていたが、DSM-5 では自閉スペクトラム症ととらえることとなっている。スペクトラムの語源は虹である。一般的に虹は 7 色で構成されているといわれるが、その 7 色を厳密に区別することは難しい。また、虹はどこからが虹で、どこからが虹でなくなるのかも区別することが難しい。これらのことからわかるように、自閉スペクトラム症は自閉症の中のサブグループを厳密に区別しただけでなく、自閉症の特性・定型発達も連続したものとしてとらえるのである。

表 1 DSM-5 における ASD の診断基準

-
- A: 複数の状況で社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥があり、現時点または病歴によって、以下により明らかになる。
1. 相互の対人的一情緒的関係の欠落。
 2. 対人的相互反応で非言語的コミュニケーション行動を用いることの欠陥。
 3. 人間関係を発展させ、維持し、それを理解することの欠陥。
- B: 行動、興味、または活動の限定された反復的な様式で、現在または病歴によって、以下の少なくとも 2 つにより明らかになる。
1. 常同的または反復的な身体の運動、物の使用、または会話。
 2. 同一性への固執、習慣への頑ななこだわり、または言語的、非言語的な儀式的行動様式。
 3. 強度または対象において異常なほど、きわめて限定され執着する興味。
 4. 感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味。
- C: 症状は発達早期に存在していなければならない (しかし社会的要求が能力の限界を超えるまでは症状は完全に明らかにならないかもしれないし、その後の生活で学んだ対応の仕方によって隠されている場合もある)。
- D: その症状は、社会的、職業的、または他の重要な領域における現在の機能に臨床的に意味のある障害を引き起こしている。
- E: これらの障害は、知的能力障害 (知的発達症) または全般的発達遅延ではうまく説明されない。知的能力障害と自閉スペクトラム症はしばしば同時に起こり、自閉スペクトラム症と知的能力障害の併存の診断を下すためには、社会的コミュニケーションが全般的な発達の水準から期待されるものより下回っていないなければならない。
-

ASD の症状には常同行動、こだわり、同一性保持などが挙げられ、強迫性障害との合併も論じられている。ASD にみられる特性のある人や強迫性障害と診断された人の中には、「自分のこだわりを上手く制御できずに相手を傷つけた罪悪感」「やめたいと思っていてもやめられないいらだち」「また人を傷つけてしまうのではないかという恐怖」などを感じ、自分自身の価値へのゆらぎ、自尊感情の低さがみられることがある。

別府・小島（2010）によると、ASD 者の保護者を対象としたアンケート調査を行ったところ、「自尊感情が同年齢の子どもたちと比べて、どのような水準か」という問いに対しては、わが子の自尊心が低い、やや低いと判断した保護者が 75% とほとんどであったという。また、「自尊感情を傷つけられる経験は、同年齢の子どもたちと比べてどの程度か」という問いに対しては、70% の保護者が同年齢の子どもたちに比べて、「少し多い」か「とても多い」と判断しているという。これら自尊感情の低さ・低下には ASD の特性が関係していると考えられる。別府・小島（2010）によると、ASD 者本人が「これは、いいことだ」と思って実行したにもかかわらず、期待通りにならない、あるいはまったく予想もしない否定的な結果を導くことになるような経験はとてもつらく、この背景として ASD 者の認知特性も関係しており、特に対人認知にかかわる感情理解や他者理解の特徴を理解しておくことが支援者には求められるという。

人は常に、自分自身を価値あるものとして肯定的に認めたいと望むものである。人は、自分自身を価値あるものとして考え自らの重要性を実感できるときには、積極的に生きていくことができ、結果、心理的な充足感を持つことができる。その反対に、自分自身を価値のないものとして否定的にしか受け入れることができないという状態は、その人にとって耐え難いものとなる。

自尊感情とは、人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである（清水，2001）。Rosenberg（1965）は、自尊感情を自己に対しての肯定的または否定的態度であるとして、自尊感情を測定する尺度を作成した。また Rosenberg（1965）は、自尊感情を他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことでありと考えている。さらに Rosenberg（1965）は、自身を「非常に良い（very good）」と感ずることではなく、「これでよい（good enough）」と感ずる程度が自尊感情の高さを示すと考えており、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることだとしている。

小島（2018）によると ASD 者の自尊感情を巡っては同年代と比べて低いとする研究がある一方で、変わらないという研究結果もあり、一致した見解が得られておらず、また、日本においては青年期や成人期における ASD 者の自尊感情については、実態すら十分に明らかになっていないという。高林・桂川・菅野（2012）の研究によると、自閉スペクトラム症傾向の高さは精神健康度の低さに影響を及ぼす可能性があるといわれている。酒井・金澤・坂野（2012）が高校生を対象に自閉症スペクトラム指数（AQ；若林他，2003）を用いた質問紙調査を行ったところ、高校生の 2.40% に ASD 傾向が確認されている。また、酒井他（2012）によると、高等学校に在籍する生徒においては、ASD 傾向が高ければ高いほど精神的健康状態が悪いことが明らかになったという。自己概念のあり方は、男女によって異なると考えられる。高橋（1975）は、自分の性の認知（性認知態度）を分析し、自己像の発達の仕方には性差があると報告している。また、日本人における自尊感情の性差についての研究も行われており、岡田・小塩・茂垣・脇田・並川（2015）によると、自尊感情はわずかに女性よりも男性のほうが高いことが示されたという。Zeigler-Hill（2013）は、女性の自尊感情の低さや、青年期における女性の自尊感情の低下の原因として、①教室場面において教師による男女差別的な扱いが存在していること、②自分の容姿に対する肯定的な態度が女性においてのみ低下すること、③女性の性役割として、自尊感情と負の関連を示す謙虚さを持つべきだという規範が存在すること、の 3 点を挙げている。

本研究では ASD 傾向と自尊感情に関連があり、ASD 傾向が高い人ほど自尊感情が低く、また性差があるのではないかと仮定し検討する。

第 2 章 方 法

調査参加者 17 歳から 70 歳までの男女 396 名（男性 113 名、女性 283 名）が調査に参加した。

分析対象 「厚生労働省の健康日本 21」において、「青年期」は「15～24 歳で、身体的には生殖機能は完成し、子

供から大人へ移行する時期」とされているため、今回は 17 歳から 24 歳までの男女 338 人（男性 75 人・女性 263 人）を分析対象とした。

調査期間 2019 年 11 月 4 日から 11 月 18 日まで web 調査を実施した。

調査計画 web 調査にはグーグルフォームを使用した。学内において男性データの収集は困難であり、男性データをできるだけ多く集めるために、年齢制限を設けず、知人への拡散を通じてデータを収集した。調査への参加依頼にあたり、①約 10 分程度のアンケートであること、②研究目的、③個人情報の取り扱い、④調査締め切り日時（11 月 18 日）を説明した上で、同意が得られた調査参加者にグーグルフォームの URL または QR コードを伝えた。また、その際に、調査参加者の条件に性別や年齢の制限のないことを加えて説明し、可能であれば、家族、知人・友人、サークル、バイト先など、差し支えない範囲でできるだけたくさんの人に URL を拡散いただくよう依頼した。また、URL を送った相手にも可能であれば拡散を依頼していただきたい旨を伝えた。

教示 「次の特徴のおおのについて、あなた自身にどの程度あてはまるかをお答えください。他からどう見られているかではなく、あなたが、あなた自身をどのように思っているかをありのままにお答えください。」と表記した。

質問紙の構成

1. 自尊感情尺度：自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982）

自尊感情尺度（付録 A を参照のこと）は Rosenberg（1965）による既存の尺度の邦訳版である。

自尊感情尺度は「少なくとも人並みには、価値のある人間である。」「色々な良い素質をもっている。」など、10 項目で構成されており、逆転項目が半数（5 項目）含まれている。5 件法で尋ね、評価は「あてはまらない（1 点）」「ややあてはまらない（2 点）」「どちらともいえない（3 点）」「ややあてはまる（4 点）」「あてはまる（5 点）」とした。逆転項目についてはこの反対（例えば、「あてはまらない」が 5 点）にした。得点が高いほど自尊感情が高いことを示す。

信頼性 箕浦・成田（2013）によると、Cronbach の α は、0.87 であり、自尊感情尺度は十分内的一貫性を有するといえる。

妥当性 山本（2001）によると、大学生 644 名（男子 400 名、女子 244 名）のデータによる主成分分析の結果、第 1 因子の寄与率が 43% であるのに対し、第 2 因子の寄与率は 13% と低いため、単因子構造であると考えられる。したがって、構成概念妥当性の中の因子的妥当性は確認されているという。

2. 自閉性スペクトル指数日本版（AQ-J）（栗田・長田・小山・宮本・金井・志水，2003）

AQ-J（付録 B を参照のこと）は英国の Baron-Cohen らによって開発された、50 項目の正常知能成人を対象とした自閉性スペクトル指数（Autistic Spectrum Quotient；AQ）を算出する質問紙の日本版である。AQ-J は「私は物事を自分 1 人でよりも他の人とすることを好む。」「私は物事を何回も何回も同じようにすることを好む。」など、50 項目で構成されており、逆転項目がおおよそ半数（26 項目）含まれている。5 件法で尋ね、評価は「あてはまらない（0 点）」「ややあてはまらない（0 点）」「どちらともいえない（0.5 点）」「ややあてはまる（1 点）」「あてはまる（1 点）」とした。逆転項目についてはこの反対（例えば、「あてはまらない」が 1 点）にした。得点が高いほど自閉スペクトラム症傾向が高いことを示す。

信頼性 Cronbach の α は、全体で 0.80 であり、男性では 0.74、女性では 0.85 であった。そのため、AQ-J は良好な内的一貫性を有するといえる。

妥当性 少人数の高機能 PDD 患者であっても対照群よりも AQ-J 得点が高く、約 1/3 の項目で有意差および有意傾向をもって、高機能 PDD 群で得点が高かったことは、高機能 PDD 群の人数が増えれば、有意差を示す項目数は増えることを示唆している。そのため、妥当性のあるものと推測される。

3. 調査参加者の基本属性：年齢、性別について回答を求めた。

第 3 章 結 果

第 1 節 AQ-J と性別による自尊感情の差異の検討

青年期（本研究における分析対象者：17 歳～24 歳）における自尊感情と ASD 傾向との関連を検討するため、

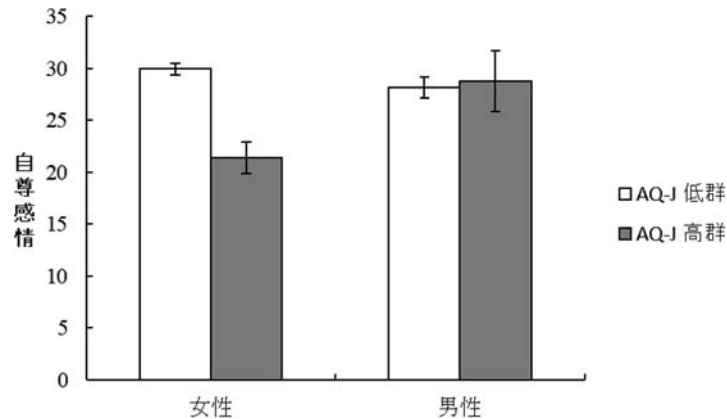


図1 性別、AQ-J 得点（高－低群）における自尊感情得点の合計

表2 AQ-J 得点（高－低群）における男女別の自尊感情得点の平均及び多重比較の結果

AQ-J 得点	自尊感情			
	女性		男性	
	平均	標準誤差	平均	標準誤差
高群	21.39	1.50	28.75	2.96
低群	29.94	0.55	28.18	1.02

自尊感情得点の合計点と AQ-J 得点の合計点を算出した。次に、32 点をカットオフ値として設定し、AQ-J 得点を高群と低群に分けた。そして、AQ-J 得点（高群・低群）と性別（男性・女性）を独立変数、自尊感情得点を従属変数として二要因分散分析を行った。その結果、性別の主効果は見られなかった ($F(1, 334) = 2.54, n.s.$)。それに対して、AQ-J 得点（高－低群）の主効果は 5% 水準で有意となった ($F(1, 334) = 5.16, p < .05$)。また、交互作用は 1% 水準で有意であった ($F(1, 334) = 6.74, p < .01$)。Bonferroni 法による多重比較の結果、女性において、AQ-J 得点高群が AQ-J 得点低群と比較し、自尊感情が有意に低かった。一方、男性においては、AQ-J 得点高群と AQ-J 得点低群で自尊感情に有意差は見られなかった。

これらの結果から、性別は自尊感情に影響を及ぼさず、AQ-J 得点の高さ、つまり、ASD 傾向の高さが自尊感情の低さに関連していると示された。また、女性においてのみ、ASD 傾向が高い人は自尊感情が低く、ASD 傾向が低い人は自尊感情が高いと示され、男性においては ASD 傾向の高低による自尊感情の差は見られなかった。

第4章 考察

第1節 ASD 傾向と自尊感情の関連について

本研究では、青年期における ASD 傾向と自尊感情の関連について自尊感情尺度と AQ-J を用いて測定し、分析した。AQ-J 得点を高群と低群に分け、AQ-J 得点（高群・低群）と性別（男性・女性）を独立変数、自尊感情得点を従属変数として二要因分散分析を行った。その結果、性別は自尊感情に影響を及ぼさないと示された。また、ASD 傾向が高いほど自尊感情が低いと、ASD 傾向と自尊感情の関連が示された。しかし、男性においては ASD 傾向の高低による自尊感情への影響は見られず、女性においてのみ、ASD 傾向の高低が自尊感情へ影響していた。このことについて、今回の調査参加者の割合が男性に比べて女性が約 2.5 倍と多かったこと、女子大学に通う学生が女性の割合の多くを占めていたことが影響しているものと考えられる。

ASD 者の困難さについて取り上げられることの一つに対人関係の調整が挙げられる。ASD 者はコミュニケーションの取り方が独特であり、臨機応変な対人関係を築くことが難しく誤解されてしまいがちだといわれている。このような対人関係の困難さを具体的に考えてみる。社会的感情の相互関係の欠如、非言語的コミュニケーションの問題、年齢相応の社会関係の困難さなどが見られるが、これは、行動の特異性（同一性保持やこだわり）によるものである。また、儀式的行動、常同的な反復行動、感情の特異性、興味関心の特異性や狭さなどの特徴も

見られる。これは、能力の偏りから、対人関係や情緒の問題を引き起こしたり、社会適応が困難になったりすることもある。さらに、目に見えないものの理解が困難、自分を守るバリアが弱い、状況の理解が困難、不安感が強い、精神年齢が幼い、記憶が良すぎる等の特徴もあり、プランニングや見通しの困難さも考えられる。ASD の特性による行動や言動であってもそれを知らない人にとっては理解しがたい場面であるという場合も多くあることだろう。そういった際の ASD 者に対する何気ない言葉や指摘、パニックにつながるような不適切なアドバイスなどが ASD 者の“失敗経験”、“物事を上手く処理できない自分自身の存在”、“予定外のことへの柔軟な対応力の欠如”など、ASD 者の自分自身への肯定的な感情の低下につながってしまうのではないかと考えられる。

第 2 節 今後の課題

本研究では男性データが女性に比べて少なかったため、今後男性の参加者を増やすことで自尊感情の性差についてより充実したデータが得られるのではないだろうか。一般的に友人は同性の友人と異性の友人に分けられるが、従来友人関係研究で扱われているのは、同性の友人との関係である。和田 (1993) によると、青年の重要な対人関係の一つに友人関係があるが、異性の友人関係となると、恋愛関係との差異を見いだすのが困難であるため、友人関係といえば同性の友人関係とされてきたという。

青木 (1993) によると、自己開示の程度には性差があり、女子の方が開示量が多く、また、青年が自己開示を行う相手として同性の友人が多く選ばれているのに対し、異性の友人はほとんど選択されないという。長沼・落合 (1998) によると、まず女子に特徴的なのは、青年期のどの段階でも、同性の友人と密着した関係を持っているということであるという。そのため、今回のアンケート調査のように、友人に拡散を依頼する場合や何か頼みごとをする場合において、女性はすぐに連絡をとることができる同性の友人関係が常に確保されていると考えられる。

一方、男子には、女子にみられるこうしたつきあい方はほとんど見られず、逆に相手に頼ろうとしていない姿が見られ、特に男子大学生は、ありのままの自分を同性の友人に表出することではなく、深いつながりを持つ友人はつくらない (長沼・落合, 1998) という。また、長沼・落合 (1998) は「男は内面をやたらに出さず、できるだけ独立・自立しているべきだ」、「女は同性の友達に相談したり頼ったりして友達と仲良くするのがよい」という性役割に関わる社会的な価値観があるように思われるという。

このように普段から男性は友人にあまり頼みごとをしない傾向にあるため、アンケート調査を友人に依頼することも容易ではなかったと考えられる。また、自身の研究に関する調査依頼 (自身の頼み事) ではなく友人の調査研究であるため、たとえアンケート調査の依頼ができたとしても、さらにそのアンケート調査の拡散を依頼するのは心理的ハードルが高かったのではないだろうか。加えて、本研究では女子大学生を通じて男性データを収集している。そのため、女子大学内での友人は女性に限られ、大学生活を送る中での出会いは大学内で出会う女性が学外で出会う男性の人数よりも実質多くなるのではないだろうか。「男性が苦手な女子大を進学先に選んだため、男性の友人はいない」、「女子大だから女性の友人はたくさんいるけれど男性の友人はいない」という声も多くあり、女子大学を進学先として選択した学生は男性よりも女性の友人の方が多い可能性が考えられる。また、「男性よりも女性と過ごすことが多いため、普段話すことのない知人男性に友人の調査協力を依頼することに少し抵抗を感じる」との意見もあった。その他に「自分自身は男性の知り合いはあまりいないから、女性になら広められると思うから、協力するね」という声もたくさん聞いた。その結果、女子大学生から調査依頼をする相手はおのずと女性が多い結果となってしまった。今回の男性データの少なさの原因として、予備調査をせずに本調査をしたことも挙げられる。あらかじめ、どの程度、女子学生から男性への調査拡散が可能かを事前にデータとして知っておくことで、調査方法の変更も検討できたと考えられる。また、インターネットを利用した調査方法であっても、友人からの抽出に限らず、異なるフィールドでの調査を実施することも検討すべきであったのではないだろうか。そうすることで、自尊感情と性差についての検討がより充実したものになるのではないかと考える。

自尊感情の低い人は、自己否定をしている人であると考えられる。例えば、いじめを受けている子どもは、いじめられ続けているうちに「自分は生きる価値がない」「自分はクラスにいない人間だ」「どうせ・・・」という思い込みを抱くようになる。その否定的な自己イメージが深く心に残り、成長すると共にそのイメージが大きく膨らんでいく。その結果、自殺未遂を繰り返すという事例もある。このような否定的な自己イメージを改善し、

解放されていくには、カウンセリングが有効だと考えられる。自分の苦しみを聴いてもらうことで、少し気持ちが軽くなったり、自分を客観的にみられるようになってきたりする。そして、「自分は価値のある人間だ」「自分は必要とされている人間だ」というような肯定的な自己イメージに変えていけると考えられる。

自己肯定には、いくつかの段階があるといわれる。初歩の自己肯定は、自分で自分に言い聞かせたり、自分で自分の良いところを探したりすることで育つ。一方、強い自己肯定感とは人と人との心のつながりの中で、本音と本音の交流の中で育まれる。他者から自分の良いところを教えてもらったり、ポジティブな要素を積み重ねていったりする中で自己肯定感は少しずつ育まれていく。そして、自分の良い点を肯定するにとどまらず、自分の弱さや欠点も自分の一部として認め受け入れていく深い自己肯定こそが重要だと考える。つまり、「強い部分も弱い部分も、光も影も、あのような自分もこのような自分も、全て自分」と認めて大切にする、全ての自分を自己受容できることが真の自尊感情の高まりだと考える。また、黒田（2016）によると、高機能 ASD 成人への小集団 CBT プログラムによっても、ASD に対する彼らの肯定的な考え方や適切な感情表現を増加させ、そしてネガティブな感情に対処するスキルを強化することができたという。

ASD 者の社会性を育むための手法の一つとして心理劇的ロールプレイングがある。心理劇的ロールプレイングとは、個人の心の内面の分析を主とした心理劇に基盤を置きつつ、社会的場面や教育的場面を取り上げ参加者一人一人の成長を引き出すことに主眼が置かれたロールプレイングである。滝吉・田中（2009）によると、心理劇的ロールプレイングを行うことで、対象化によって獲得した自己の視点と他者の視点との類似や相違は、自己を映し出す他者個人の中にある多様性と、複数の他者の多様性の両方を含む相対化により、幅広い視野を獲得し、統合されるという。このように役として実際に演じてみることで、今まで理解しにくかった相手の感情や他者の多様性などに気づくことができるのである。そのため、適切なアプローチをすることが ASD 者の認知を良い方向に発展させて豊かな視野を獲得させることにつながり、そのことが延いては ASD 者の社会生活における困難さを減少させ、自尊感情を高めることへとつながるのではないだろうか。

また、周囲が適切なかかわり方をするだけでも ASD 者の自尊感情を保つことにつながると考える。ASD 者は、パニックを起こしやすいといわれる。そのパニックは誰にも止められず、本人にとっては人生で一番苦しいことともいわれる。パニックの原因は、ダメ出しをされた時、忘れ物をした時、自分の意見が通らなかった時、からかいを受けた時、分からない時、責められた時などが考えられる。パニックの症状は一人一人違うが、その主なものは、ふざける、怒る、とじこもる、泣く、喋る、かたまる、悪口を言う、うそをつく、暴力的になるなどが見られる。このようなパニックを起こした時には、カームダウンエリアで心を休ませたり、次にすべきことを分かりやすく伝えたりすることが必要である。無理やり何かをさせるとパニックがもっと増したり、説得やなぐさめがトラウマとなって二次障害となったりする可能性もある。さらに、パニックになりにくくするためには、予告をして見通しをたたせたり、こだわりを利用して気持ちを切り替えたりすることも大切である。

また、ASD 者は視覚的にわかるように提示されたものについては容易に理解できるが、言葉で聞いても理解できないということがある。同じ質問を何度も繰り返して相手から嫌がられるという人がいる。彼らは同じ答えが返ってくることを承知していながら同じ質問をあたかも際限がないように繰り返し、目で確かめることができるようになるまで問いなおし続けなければならないのだという。また、相手が理解しにくいことをあれこれ言葉で問いかけてくることを聞いていることが苦痛であるため、一方的に話し続けることで防衛しなければならないという人もいる。ASD 者としては相手の話を理解したいと思い、相手からの回答が別のかたちで返ってくることを期待し、なんとか意思疎通を図ろうと考えて一生懸命に質問を繰り返しているのであろうと考えられる。それだけ頑張っているのに相手からはうんざりされたり、怒られたりしては社会的な場面でどんなに生きづらいだろう。その他にも、社会的な状況において自分の行動を自分で考えて実行することに困難さを感じる人もいる。そのため視覚的に周囲の行動を理解し、そのうえで自分の行動に反映させようとすることもある。しかしその場合、誰かの行動を目で確かめて、行動の順序に番号をつけながら文字で書きとめ、それから一連の行動を順番通りに暗記し、その後やっと元の社会場面に戻ってきたら、もうその状況はなくなって役に立たなかったということが何度もある。真面目に一生懸命に頑張っているのに上手くいかず、相手とも上手くコミュニケーションをとることができない日常が繰り返される苦しみは社会に、仲間や家族からさえどれほど理解されてきたのだろうか。このようなことから ASD の特性が十分自尊感情の低下に影響を与えると考えられる。周囲が ASD 者の困難

さや特性を知ることによって適切なかわりを心掛けることにより ASD 者は自分の自尊感情を高めることができ、両者の心の健康が保たれ、互いに社会場面において生きやすくなるのではないだろうか。

ここで、改めて ASD 特性の持つ良さを中心にその適切な対応を考えてみる。ASD 特性の良さは正義感が強くまじめである、論理的思考が得意、記憶力が抜群である、パソコンなど機器関係に強さを発揮する、等が考えられる。このような ASD の特性を生かすためには問題行動や困難さへの対応を考える前に、特性の持つプラスの面を評価し、同化圧力をかけず、その良さを発揮する環境を整えることが大切である。そして、適切な対応を通して本音と本音の交流をしながらどのような自分も受け入れ、自尊感情を高めることを目指したい。

謝辞

本論文の執筆にあたりご指導をいただいた中尾和久教授、酒井貴庸准教授、またご助言いただいた安井知己准教授、星野貴俊准教授、アンケート調査やさらにはその拡散までも快く引き受け協力してくださいました皆様に心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。本研究を通して、青年期における ASD 傾向と自尊感情の関連を学ぶことができました。発達障害をはじめ社会での生きにくさを感じる方々の役に立つ研究を今後も続けていきたいと考えております。最後になりましたが、これまで温かい目で見守ってくれた友人や家族に、深く感謝申し上げます。そして今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

引用文献

- 青木多寿子 (1993). 青年における身近な他者への役割期待の違いと性差. 心理学研究, **64**(2), 140-146.
- 別府 哲・小島道生 (2010). 「自尊心」を大切にしたい高機能自閉症の理解と支援. 有斐閣
- Black, D. W., & Grant, J. E. (2014). *DSM-5 Guidebook: The essential companion to the diagnostic and statistical manual of mental disorders*. Virginia: American Psychiatric Publishing. (ブラック, D. W.・グラント, J. E. 高橋三郎 (監訳) (2016). DSM-5 ガイドブック——診断基準を使いこなすための指針—— 医学書院)
- 小島道生 (2018). 自閉スペクトラム症者の自尊感情と主観的幸福感. LD 研究, **27**(4), 491-499.
- 越野由香 (2011). 高機能自閉症児の自己肯定感と子ども集団——通常学級でのある取り組みから——. 実践女子大学紀要, **32**, 13-23.
- 栗田 広・長田洋和・小山智典・宮本有紀・金井智恵子・志水かおる (2003). 自閉性スペクトル指数日本版 (AQ-J) の信頼性と妥当性. 臨床精神医学, **32**(10), 1235-1240.
- 黒田美保 (2016). 発達障害者の就労に向けた学習と支援 ——多面的なアセスメントに基づいて——. 教育心理学年報, **55**, 295-303.
- 箕浦有希久・成田健一 (2013). 2 項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討. 感情心理学研究, **21**(1), 37-45.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係. 青年心理学研究, **10**, 35-47.
- 岡田 涼・小塩真司・茂垣まどか・脇田貴文・並川 努 (2015). 日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析. パーソナリティ研究, **24**(1), 49-60.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the Adolescent Self-Image*. Utrecht University Library. Retrieved from <https://www.docdroid.net/Vt9xpBg/society-and-the-adolescent-self-image-morris-rosenberg-1965.pdf> (2020 年 1 月 11 日)
- 酒井貴庸・金澤潤一郎・坂野雄二 (2012). 高等学校教師の自閉症スペクトラム障害理解度と ASD 傾向の生徒における精神的健康状態の関連. 日本教育心理学会総会発表論文集, **54**, 438.
- 清水 裕 (2001). 自己評価・自尊感情. 山本真理子 (編) 心理測定尺度集 I ——人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉——サイエンス社
- 高林大輝・桂川泰典・菅野 純 (2012). 自閉スペクトラム症傾向の高さが大学生活に及ぼす影響. 日本教育心理学会総会発表論文集, **54**, 628.
- 高橋美津子 (1975). 青年前期における性意識と自己像——性認知態度と自己像間差異との関連——. 日本教育心理学会総会発表論文集, **17**, 254-255.
- 滝吉美知香・田中真理 (2009). ある青年期アスペルガー障害者における自己理解の変容——自己理解質問および心理劇的ロールプレイングをととして——. 特殊教育学研究, **46**(5), 279-290.
- 和田 実 (1993). 同性友人関係: その性および性役割. タイプによる差異. 社会心理学研究, **8**, 67-75.
- 山本真理子 (2001). 自己評価・自尊感情. 堀 洋道 (監修) 心理測定尺度集 I ——人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉——(pp.29-31) サイエンス社
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, **30**(1), 64-68.
- Zeigler-Hill, V. (2013). *The importance of self-esteem*. Psychology Press. Retrieved from https://www.researchgate.net/publication/260792669_Self-structure_The_social_and_emotional_contexts_of_self-esteem (2020 年 1 月 11 日)

付録 A

自尊感情尺度

-
1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である。
 2. 色々な良い素質をもっている。
 3. 敗北者だと思うことがよくある。
 4. 物事を人並みには、うまくやれる。
 5. 自分には、自慢できるところがあまりない。
 6. 自分に対して肯定的である。
 7. だいたいにおいて、自分に満足している。
 8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。
 9. 自分は全くだめな人間だと思うことがある。
 10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。
-

付録 B

自閉性スペクトル指数日本版 (AQ-J)

-
1. 私は物事を自分1人でよりも他の人とすることを好む。
 2. 私は物事を何回も何回も同じようにすることを好む。
 3. もし私が何かを想像しようとする、心の中に映像を作り出すのはとても簡単だ。
 4. 私は、しばしば他のことが見えなくなるほど1つのことに強く夢中になる。
 5. 私は、他の人が気づかないときにも、よく小さな音に気づく。
 6. 私は、車のナンバープレートまたは同様な一連の情報にいつも注目する。
 7. 他の人たちは、私が言ったことをよく失礼だと言う、たとえ私がそれは丁寧だと思っていでも。
 8. 私は物語を読んでいるときに、登場人物たちがどのように見えるだろうかを簡単に想像できる。
 9. 私は日付に魅せられている。
 10. 社交的な集まりの中で、私はいくつかの異なった他人の会話を容易に聞き取ることができる。
 11. 私は社交的な場面を気軽に思う。
 12. 私は、他人が気づかない細かいことに気づく傾向がある。
 13. 私はパーティよりはむしろ図書館に行きたい。
 14. 私は物語を作るのは簡単だ。
 15. 私は、自分が物よりも人により強くひきつけられているのに気づいている。
 16. 私は、もし追求することができないと当惑してしまう、とても強い興味をもつ傾向がある。
 17. 私は、社交的なおしゃべりを楽しむ。
 18. 私が話すときには、他人が横から口を出すのは、必ずしもいつも簡単とは限らない。
 19. 私は数に魅せられている。
 20. 私は物語を読んでいる時に、登場人物の意図を理解するのが難しい。
 21. 私は物語を読むことを特別には楽しまない。
 22. 私は、新しい友達をつくるのは難しいことに気づく。
 23. 私は、いつも物事のパターンに気づく。
 24. 私は、博物館よりはむしろ劇場に行きたい。
 25. もし日課が妨げられても、それは私を当惑させない。
 26. 私は、しばしば、私がどうやって会話を続けていくかを知らないことに気づく。
 27. 誰かが私に話しているときに、私は行間を読むのが簡単なことに気づく。
 28. 私は、いつも、細かなことよりは、むしろ全体像に集中する。
 29. 私は、電話番号を覚えているのがとても上手ではない。
 30. 私は、状況や人の外見の小さな変化に、いつも気づくわけではない。
 31. もし私が話しているのを聞いている人が退屈しているなら、私はどのように話すかを知っている。
 32. 私は、一度に2つ以上のことをするのは簡単だ。
 33. 私は、電話で話しているとき、いつ自分の話す番かがはっきりしない。
 34. 私は、物事を自発的にすることを楽しむ。
 35. 私は、しばしば冗談の意味をわかるのが最後になる。
 36. 私は、人の顔を見るだけで、その人が考えていることや感じていることが容易にわかる。
 37. もし中断があっても、私はやっていたことにとても早く戻ることができる。
 38. 私は、社交的なおしゃべりが上手だ。
 39. 人は、私が同じことを長々と話し続けるとよく言う。
 40. 子どもの頃、私は他の子どもたちと、ごっこ遊びが入ったゲームをよく楽しんだものだ。
 41. 私は、物事のカテゴリーについての情報を集めるのが好きだ（たとえば、自動車、鳥、電車、植物の種類など）。
 42. 誰か他の人だったらどうだろうと想像することは、私には難しい。
 43. 私は、私が関与するどんな活動も注意深く計画することを好む。
 44. 私は、社交的な機会を楽しむ。
 45. 私は、人の意図をわかるのがむずかしい。
 46. 新しい状況は、私を不安にする。
 47. 私は、初めての人に会うのを楽しむ。
 48. 私はよい“外交官”である。
 49. 私は、人の誕生日を覚えているのがとても上手ではない。
 50. 私は、ごっこ遊びが入ったゲームを子どもたちとするのは、とても簡単だ。
-